



← 満開の桜と旧本館のあやなす妙味を堪能する人々(上)と、お花見シーズンの弦楽部ミニコンサート(下)

平成24年4月10日  
茨城県立土浦第一高等学校  
進修同窓会旧本館活用委員会

春爛漫。優美に枝をしならせ、ひときわ目映い旧本館前のしだれ桜。国の重要文化財である建物との取り合わせは、何とも言えぬ趣が醸し出されている。お花見シーズンにあわせ、旧本館の特別公開日を設けたが、多くの方が、風情豊かなこの「魅入りスポット」の醍醐味を、十分満喫していたようであった。

春は、同時に、初々しい新入生を迎える季節でもある。今号は、同窓生や在校生から寄せられた意見をもとに、教育の場としての旧本館を追ってみたい。

## 旧本館での授業がなくなって32年

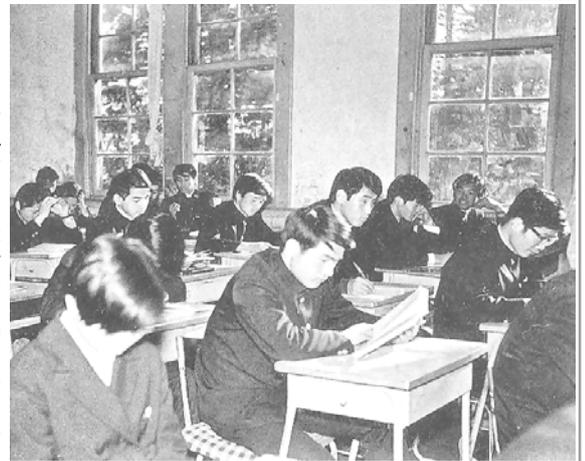
麗らかな春の陽光に映えわたる、見事な桜とシックな旧本館の調和の美。実に風雅で、心が癒される。この情景に魅せられてか、旧本館周辺では、どこからともなく現れ、ぎこちなさを漂わせながら散策する在校生が目につく。そのほとんどが新入生で、少し経つと、彼らが視線を定め、見遣るのはやはり旧本館校舎。旧本館は昭和51年2月3日に国の重要文化財に指定された。その後しばらくの間は、教室として普段の授業で使用されていたが、昭和55年4月30日をもって、竣工なった永久校舎(現在の本館校舎)に完全移転し、通常授業では使われなくなった。もちろんその後、生徒会活動や「一高祭」などで部分的には活用はされてきたが、通常授業の教室からはやや離れている場所に位置し、一般生徒にとっては、遠い存在になってしまったと言えるのかもしれない。

現在は、文化財保存の観点も加味されて定められた「使用心得」のもと、在校生では、吹奏楽部と弦楽部がふだんの活動の場として使用しているだけである。使用に際しては、本建造物が国の重要文化財であることに十分留意し、次の心得を遵守して大切に扱い、施設の保全に努めること。

- ドア・窓などの乱暴な開閉は絶対に行わないこと。
- 落書きや破損行為は絶対に行わないこと。
- 掲示物等は所定の場所を使用し、壁・柱等の施設にテープなどで貼付しないこと。

(9項目中の3項目を抜粋)

「旧本館使用心得」(昭和61年6月)



旧本館「復元教室」における授業風景(1969年卒・21回生)

## 旧本館教室で学び、親しんだ世代

旧本館は、明治38(1905)年より昭和55(1980)年までの75年の長きにわたり、教室として使用された。ここで2万名近くの同窓生が学び、巣立っていった。

その一人である渡辺良治氏(高21回・昭44年卒)は「想えば、在校当時は、あの天井の高い本館校舎は自分にとって冷酷であった：何とも出口の無い苦しい日々であった」と、旧本館が、苦悩した日々の高校時代と重なり合う、と振り返る。だがその後、母校土浦一高に対するイメージが次第に変化していく。自らの結婚式の主賓挨拶で高校の恩師長壁英進先生が「高田保」(中12回卒・詳細は小紙18・20号)を取り上げたのを機に、高田の作品を探し求め、その過程で母校への距離が近くに感じられるようになっていったのだ。そして評論家紀田順一郎氏が、今、もっと読まれていい作家として彼を紹介したり、女優澤村貞子が、彼の脚本を絶賛したりしている

のに出会うと、妙に嬉しくなり、さらに文芸評論家小林秀雄が、病床に伏す彼に、幼なじみでもあるかのように「保ちゃん！」と泣かんばかりに回復を念じていたのも知った。そうした中で、素晴らしい先輩がいた「一高で学んだことを誇りに思わなかった自分が恥ずかしくなってきた」と述懐する。拝受したお手紙の概略は以上であるが、それと一緒に、今でも大事しているという写真が同封されていた。ほぼ30年前に、八坂神社への初詣の帰りに母校に立ち寄り、親類・家族と撮った記念写真である。



母校玄関前で(後列真ん中が渡辺氏)

現在の土浦一高校長武井秀一先生(高23回・昭46年卒)からも、旧本館での授業にちなむ回想記を頂戴した。

「当時のこととしては、あの独特の臭い(防癌剤の油か?今でもする)と、旧本館教室での授業風景が思い出される。高い天井であるため、先生の声が響き、格調高い講義内容と相まって、多くの恩師の声が耳に残っている。また、天井が高いので、夏は涼しかったが、冬は大変寒く(当時、教室にストーブは無かった)コートをもたないながら授業を受けた記憶がある。さらには、上下開閉式の窓のつくりは、明治期の建物ならではの土浦一高独特のものであり、非常に郷愁深い



本校に赴任当時の武井教諭（左端、現本校校長、1979年）

ものを感じる」と、生徒時代を追慕する。そして武井校長は、自らが若き教師として母校に赴任し、血気盛んに教鞭をとっていた頃も思い返される。

「現在の旧本館は、資料展示室と吹奏楽部と弦楽部の部室兼練習室になっているが、私が教員として転勤した時はまだ国語科と数学科の職員室（大職員室）に加え、普通教室としても使用されていた。前任校の境高校で異動辞令（現在は新任校）をいただき、旧正門を入るとすると櫻が満開であったのを、今でも鮮明に覚えている。旧本館校長室で当時の遠藤校長に赴任の挨拶をし、すぐに、大職員室で先生方に紹介された。旧本館は、着任してきた1年間は、授業で使用されたが、翌年の昭和55年3月末に現在の本館が竣工し、授業での使用は閉じられた。短い期間ではあったが、教師として旧本館で授業ができたことは、幸運であ

りうれしい限りであった。生徒の時は、先生の声が響いて格調高く感じたが、授業をする身になると、逆に声が響いてしまって喋りにくかったのが忘れがたい。その後、旧本館には生徒会室が置かれ、何年間か担当した「一高祭」の際には、生徒と幾度も議論したり、一緒に準備に当たったりした懐かしい思い出が詰まっている」と胸熱く顧みるものである。

### 学びの殿堂「旧本館」の保存と活用

以上は、旧本館が通常授業の教室に使用されていた往時を偲び、懐旧の念を混じえたものだが、その後の卒業生が心に留めている旧本館はどうであろうか。

現在の本校教諭小澤賢一氏（高37回・昭60年卒）は、「生徒在学中は、館内に入ったことはほとんどなく、あまり印象に残っていない。本校に赴任後、一般公開日の手伝いをするうちに、その価値に気付いたというところだ。生徒たちにはもっとその歴史に触れて欲しい」と、その思いを書面で届けてくれた。

同氏は、母校の教師として再び本校に戻って来られ、旧本館の価値を再認識する機会に恵まれたが、それはむしろ稀なケースと言えよう。大部分の卒業生にとっては、旧本館は、縁の薄いものか、場合によっては脳裏にさえあまり刻まれない状況なのかもしれない。

そこで旧本館活用委員会では、昨年11月に在校生（各学年1クラスずつ）に簡単な「旧本館に関するアンケート」を実施してみた。これに協力してくれたのは、1年生35名、2年生38名、3年生43名の合計116名であった。

質問の内容は右下の通りである。

- (1) あなたは今までに旧本館の中に入ったことはありますか？
- (2) あなたは本校の旧本館が国の重要文化財であることを知っていますか？
- (3) あなたは旧本館がロケ撮影等に使用されたTV番組を見たことがありますか？
- (4) 旧本館について、感想、提案、要望などがありましたら、自由に書いてください。

(1) について、「ある」と答えた生徒は、1年生34名(97%)、2年生14名(37%)、3年生25名(58%)であった。1年生がほぼ全員が入ったことがあると答えたのは、武井校長が「できれば、本校で学んだ生徒には、一度でもいいから旧本館教室での授業を体験させてやりたい」という、心に秘めていた積年の想いを、早速「道徳」の授業という形で実現させたからにはほかならない。



旧本館「復元教室」で行われた武井校長の「道徳」授業（2011年11月）

2、3年生は、ほぼ2人に1人が「ない」と答えているが、その理由として、「関心がない」「時間が足りない」「入りづらい」等々をあげている。中には「入れることを知らなかった」という生徒もいた。(2) については、ほとんどの生徒

が知っていると答えており、貴重な建物であるとの認識は浸透しているようである。(3) については、「一度も見たことはない」という生徒が、1年生17名(49%)、2年生10名(26%)、3年生14名(33%)であった。(4) については、様々な意見が書かれていた。「明るい照明が欲しい」「冷暖房が欲しい」(文化財の維持管理という側面もあるが、現在、鋭意努力中と聞く)など、設備に関するものが大多数であった。「皆で掃除をし、一高の伝統を守りたい」とか、「他校の生徒から『一高の旧本館はきれいだ』と言われて嬉しかった」と、共感をそそることをあげてくれた生徒もいた。全体としては、明治期の建築技術の粋を尽くし、重厚なる佇まいが目を引く旧本館の建物を誇りに思い、大切にしていきたいという本校生の気概が感じられるアンケート結果であった。

最後に、現在の本校教諭関隆一氏から賜った一文(要旨)を紹介したい。「県東地区の学校で学び育った私は、旧本館の存在を知らなかった。2004年、会議で土浦一高を訪れた折に旧本館を偶然目にした。驚きと感動で、思わず息を飲んだ。その後、土浦一高に勤務することになった。赴任が決まったとき、最初に思い出したのは旧本館の厳かな姿であった。伝統ある本校のシンボルとして、これからも旧本館は、確かな存在感を放ち続けるものと確信している」と、荘厳なる威容と尽きない魅力を綴られている。言うまでもなく、旧本館は本校だけのものではなく国の宝物。この保存と活用の責任の重さに、私どもは、今更ながらに、身が引き締まるのを覚えるのだ。